

鳥取県因州和紙協同組合

理事長 房安 光 様

2009年11月30日

鳥取県反原発連絡会
青谷原発設置反対の会
鳥取県西部原発反対の会
反原発市民交流会(中部)
反原発市民交流会・鳥取
ウラン残土市民会議

(連絡先)鳥取県反原発連絡会幹事

松井幸人

〒682-0922 倉吉市福守町283-3

TEL 0858-28-3855

中国電力の『エネルギー』の因州和紙の特集について

このたび配布されている中国電力のチラシ『エネルギー』(2009. 11)に、「島根原子力発電所3号機」の宣伝と並べて青谷特産の因州和紙が宣伝されていることは、伝統と先端技術を結合させた青谷の因州和紙が「島根原子力発電所3号機」の「クリーン宣伝」のダシに使われたものとしか言いようがありません。

これまで、青谷原発設置反対運動を闘ってきた、島根原発反対を闘ってきた、そして、上関原発建設反対を闘ってきた住民の声や国民を無視した愚行であり、ここに厳重に抗議します。1999年の茨城県東海村の核燃料加工工場の臨界事故の衝撃、あるいは、あわやの重大事故はまぬかれたとはいえ柏崎刈羽原発を傷だらけにした2007年の新潟県中越沖地震の恐怖は、私たちの記憶に新しいところです。

地球汚染をもたらした1986年の旧ソ連のチェルノブイリ原発事故で実証されたように、原子力発電はとてつもない大事故の危険性をはらむと同時に、かりに事故が起きないと仮定した場合でも、使用済み核燃料の問題は未来に先送りされ、要するに今を生きているごく一部の人間のためのものでしかありません。未来の人間、そして、人間以外の生きものにとっては害でしかない原子力発電と和紙産業とは全く相容れないものではないかと考えます。

このたび、「島根原子力発電所3号機」の宣伝にびたりと並べて、「伝統と先端技術が織りなす因州和紙の里 鳥取『青谷町』」の見出しで、カラー写真入りの特集記事が組んであ

りましたが、これは因州和紙が原発に利用されたとしか言いようがないと考えます。

何故、このようなことになってしまったのか、強い疑念と上に述べたような憤りを感じざるを得ません。これまで、島根原子力発電所1、2号機で、長い活断層の問題、プルサーマル計画の問題、使用済み核燃料の問題など、あらゆる危険に対して臭いものにはフタで隠してきた中国電力です。にもかかわらず、中国電力は2011年の営業運転を目指して3号機の建設を進めていますが、島根の住民はもとより私たちもこれに強く反対し、この建設計画の中止を求めてきました。

このたびの記事掲載の行為は、かつて郷土の環境を守ろうとした気高郡連合婦人会の人たちの『原発のないふるさとを』の必死の闘い、あるいはまた、県内の各界各層の代表者たちが原発反対共同アピールで訴えた切実な想いに、冷や水をかける行為であります。少なくともこうした想いを共有した県民に背を向けていることは否定しようがありません。

私たちは、青谷特産の因州和紙を伝統の技術を生かした誇るべき郷土の貴重な資源と考えるがゆえに、それが原発の宣伝に利用された今回の『エネルギー』の特集をまことに遺憾に思います。中国電力がクロをシロと言いくるめるため、この特集を組んだことは疑いありませんが、むしろ名誉を汚されたのはダーティな原発の宣伝に悪用された因州和紙の方です。かりにそう意識していなかったとしても、国論を二分して大問題を抱えた原発の宣伝に、青谷特産の因州和紙が与することは痛ましいことでした。ピュアな技術と品質の和紙を全国に誇らしく売り出すためにも、このようなことが二度とないよう本抗議文をもって申し入れるものです。

鳥取市役所青谷総合支所

支所長 西村 明良 様

2009年11月30日

鳥取県反原発連絡会
青谷原発設置反対の会
鳥取県西部原発反対の会
反原発市民交流会(中部)
反原発市民交流会・鳥取
ウラン残土市民会議

(連絡先)鳥取県反原発連絡会幹事

松井幸人

〒682-0922 倉吉市福守町283-3

TEL 0858-28-3855

中国電力の『エネルギー』の因州和紙の特集について

このたび配布されている中国電力のチラシ『エネルギー』(2009. 11)に、「島根原子力発電所3号機」の宣伝と並べて青谷特産の因州和紙が宣伝されていることは、伝統と先端技術を結合させた青谷の因州和紙が「島根原子力発電所3号機」の「クリーン宣伝」のダシに使われたものとは言いようがありません。

これまで、青谷原発設置反対運動を闘ってきた、島根原発反対を闘ってきた、そして、上関原発建設反対を闘ってきた住民の声や国民を無視した愚行であり、ここに厳重に抗議します。1999年の茨城県東海村の核燃料加工工場の臨界事故の衝撃、あるいは、あわやの重大事故はまぬかれたとはいえ柏崎刈羽原発を傷だらけにした2007年の新潟県中越沖地震の恐怖は、私たちの記憶に新しいところです。

地球汚染をもたらした1986年の旧ソ連のチェルノブイリ原発事故で実証されたように、原子力発電はとてつもない大事故の危険性をはらむと同時に、かりに事故が起きないと仮定した場合でも、使用済み核燃料の問題は未来に先送りされ、要するに今を生きているごく一部の人間のためのものでしかありません。未来の人間、そして、人間以外の生きものにとっては害でしかない原子力発電と和紙産業とは全く相容れないものではないかと考えます。

このたび、「島根原子力発電所3号機」の宣伝にびたりと並べて、「伝統と先端技術が織りなす因州和紙の里 鳥取『青谷町』」の見出しで、カラー写真入りの特集記事が組んであ

りましたが、これは因州和紙が原発に利用されたとしか言いようがないと考えます。

何故、このようなことになってしまったのか、強い疑念と上に述べたような憤りを感じざるを得ません。これまで、島根原子力発電所1、2号機で、長い活断層の問題、プルサーマル計画の問題、使用済み核燃料の問題など、あらゆる危険に対して臭いものにはフタで隠してきた中国電力です。にもかかわらず、中国電力は2011年の営業運転を目指して3号機の建設を進めていますが、島根の住民はもとより私たちもこれに強く反対し、この建設計画の中止を求めてきました。

このたびの記事掲載の行為は、かつて郷土の環境を守ろうとした気高郡連合婦人会の人たちの『原発のないふるさとを』の必死の闘い、あるいはまた、県内の各界各層の代表者たちが原発反対共同アピールで訴えた切実な想いに、冷や水をかける行為であります。少なくともこうした想いを共有した県民に背を向けていることは否定しようがありません。

私たちは、青谷特産の因州和紙を伝統の技術を生かした誇るべき郷土の貴重な資源と考えるがゆえに、それが原発の宣伝に利用された今回の『エネルギー』の特集をまことに遺憾に思います。中国電力がクロをシロと言いくるめるため、この特集を組んだことは疑いありませんが、むしろ名誉を汚されたのはダーティな原発の宣伝に悪用された因州和紙の方です。かりにそう意識していなかったとしても、国論を二分して大問題を抱えた原発の宣伝に、青谷特産の因州和紙が与することは痛ましいことでした。ピュアな技術と品質の和紙を全国に誇らしく売り出すためにも、このようなことが二度とないよう本抗議文をもって申し入れるものです。